

らららん9号



2018. 9. 19

失敗をおそれないで!!

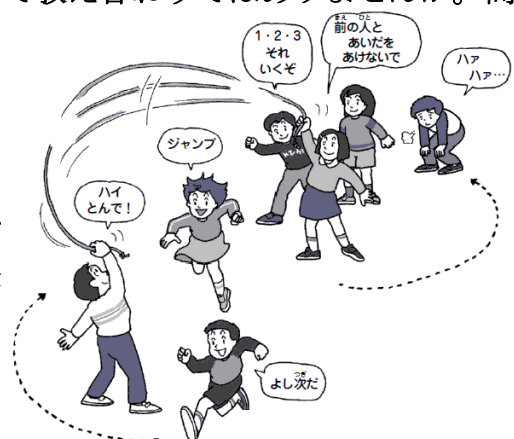
子どもたちを見ていると、人前で話したり何か作ったりするときにとっても緊張している子を見ることがあります。「うまくできなかつたら、どうしよう」と不安そうな表情がうかがえます。どうも失敗することを怖がっているようです。失敗したくないという気持ちは誰にでもあります。しかし、成長するためにはチャレンジすることが大切です。チャレンジするんですから、当然失敗もあるのです。子どもたちには、失敗を恐れない心を身につけてもらいたいと思うのです。

保護者の皆さんが、子どもが失敗すると「こんなことで大丈夫?」「ああ、また失敗して!」と不安や必要以上に落胆すると、その感情は子どもにも伝わります。ですから、「失敗しても、挑戦することに意義がある」「失敗は大切な経験。失敗したから直すところがわかる。だから、よかった」と考えられるようにすることです。

親は「失敗することもあるから、気にせず思いきりやっておいで!」と言ってあげるほうがよいのではないのでしょうか。あとは子どものチャレンジを見守って、もし失敗しても突き放さずに子どもと向き合って話を聞くことです。子どものがんばりを認め、笑顔で受け止めてあげるようにすることで、新たなことにチャレンジできる子どもに成長していくのではないのでしょうか。

もう30年くらい前のことです。小学校の担任をしていたとき、答えが間違ったり、図工の作品がうまくできなかつたりする子がいました。そんな友だちの失敗を、冷やかす子どもがいました。私はこのとき、ていねいな指導が必要だと思いました。「だれでも失敗したくないと思っています。特に教室でみんながいるときに自分の答えが間違っていると、とても恥ずかしいと思ったことは誰でもあるでしょう。冷やかされたら、その人はもう発表することや作品を作ることさえ嫌になるでしょう。こんなときは、クラスのみんなの温かさが重要です。誰でも間違えた答えは言いたくありません。よく考えたんだけど、たまたま間違えることはあるのです。間違いを冷やかすことは絶対にいけません。それより、なぜ間違えたか、同じ失敗を繰り返さないようにみんなで教え合おうではありませんか。間違えても、誰かがフォローしてくれるクラスは、きっとみんなが大好きなクラスになると思うよ」と話しました。

それから2学期の終わりに「校内なわとび大会」が行われることになりました。長縄を使って1分間にできるだけ多く跳ぶ競技です。私が担任するクラスは長縄が苦手な子が3～4名いました。勝ち負けを競うと、この子たちが勝敗の原因になり、必ず攻撃されるだろうと思いました。「このクラスは一番にならなくても



いい。それより苦手な人ができるように後ろの人がタイミングを教えたり、縄を回す人が工夫したり、みんながフォローして、できるだけ失敗を減らしていこう。そんな練習をしていこうね」と話しました。練習段階では、他のクラスと私のクラスでは跳んだ回数が全然違うのです。やっぱり、仕方ないかと思いました。でも、子どもたちが一生懸命頑張ったと喜び合うことができたなら、最下位でもぜんぜん問題ないと覚悟をしました。

しかし、大会当日、優勝候補と思われたクラスは、焦りすぎて次々に失敗したのです。結局、失敗を極力減らすように確実に跳んだ私たちのクラスが優勝したのです。子どもたちも私も「これは夢か？」と思うくらい意外でした。このなわとび大会以降、子どもたちはとても仲良しになりました。私はこのことのほうが、はるかにうれしいことでした。

失敗を恐れる子には、チャレンジする気持ちを育てたいと思います。本人がやりたいことを見つけ夢中になって取り組むことが、失敗してもあきらめない意欲や根気よく頑張る心を育てるのです。園では、夢中になって取り組める場を、しっかり作っていきたいと思っています。

また、失敗をした友だちに対しては、相手を傷つけるのではなく教え合ったり助け合ったりする子どもたちに育てていきたいと思っています。

今、注目されるコーチという人

最近、話題になるスポーツ界のパワハラ事件はなかなか収まりをみせません。女子レスリング、アメフト、ボクシング、女子体操、大学駅伝など連鎖反動的に報道されています。2020年の東京オリンピックをにらんだ選手強化という面もあるのでしょうか。しかし、強制では、選手は育たないと感じてしまうのです。

こんなとき、全米オープンテニスで大坂なおみ選手が優勝をしました。彼女のコーチとの関わりは、パワハラ界のそれとは一線を画しています。コーチのサーシャ・バインさんは、彼女に精神面の安定をアドバイスしました。また、プレーでは60~70%の力で確実性を高めることも教えました。そのことを大坂さんが大切なことだと心から思い、実践したからこそその快挙だったと思うのです。改めてコーチと選手の信頼関係が大切なんだと思いました。大坂選手のことが中国新聞のコラムに載っていました。その一部を紹介します。

15世紀ごろ、ハンガリーの小さな街コチで造った馬車が欧州に出回った。はがねのバネをサスペンションに使い、でこぼこした道も快適に走れたからという。コチはそのまま馬車を表す言葉になった。英語では「coach(コーチ)」という。教えを授かる者を運ぶ道具という比喻から、さらに「指導者」の意味も加わる。



そのコーチに、女子テニスの大坂なおみ選手が運んでもらったのは世界の頂だった。教えを受けて1年もしないうちに全米オープンを制した。もともとパワーに定評があったが、力任せに相手をねじ伏せようと力みがちだった。気持ちが乱れてラケットをたたきつけるなど自滅も多かった。今季は、自らの怒りでラケットを振り上げてその後、ぐっところえる姿が目立つ。よく走る、我慢する、頭を使う。精神面での安定が日本勢初の快挙につながったのだろう。 ※9/11 中国新聞アルファより